
*承・前編

祝融の要請は、官僚制整備のための様々な資本投下と意見交換やら、その大商人としての知識や経験を活かした父自身の暫定政務参加やら、戦乱による焼失を免れた豊富かつ貴重な蔵書の一部の無償貸与やら、まあ、色々であったらしい。そして、既にこの革命に大量の投資をしていた父は、その多くを断るわけにはいかなかった。祝融の方もそれを見越しての要請だったのでだろう。凶々しい女だと憤るべきか、そういう女が丞相ワシラを勤めているのならば、革命は成功であり、投資は何倍にもなって返ってくるのだと喜ぶべきか、後にディアウスは色々父の立場を想像してみることになる。

だが、十にも満たぬ少年だった当時としては——その受け入れざるをえなかった要請の中で、最も些細なもの、すなわち、ある少女をディアウスの住む父の自宅に預かることになったことこそが、最も重大なる事件であった。

ディアウスの（ほとんど意識しないが、一応は義理の）父であるラフマンには親類縁者がいなかった。彼の妻であり、ディアウスの（こちらにも一応は義理の）母であるヌーラとの間に子供がこれから生まれない限り、永久に血縁者は零のままだ。

いわゆる《唯一の神に帰依する者》の妻帯は四人まで、あとは妾で我慢せねばならないとされている。逆に言えば、ヌーラ以外に妻を持たぬラフマンはあと三人まで妻を娶ることができる。しかし、その妻たる者の身には条件があった。それは《唯一の神に帰依する者》、あるいは《啓典の民》——要するに唯一神の信徒であることだ。そして、この制約がラフマンのこれ以上の妻帯は事実上不可能にしていた。

なにせ、神の唯一性タウヒートという概念は、このアツザフルでは希薄である。そりゃそうだろう。『神は一つなのだよ』と言われりゃ、誰もが『どうして？神様なんて、うじゃうじゃ何柱も坐すじゃないか。特に帝都の精霊密度は馬鹿みたいに濃くて、その自然結晶化だって、しょっちゅうな程だ』と答えるに決まっている。

実際、未だに父と母は自分達以外の同胞と出会っていないらしい。

そして、この二人の間に、どうも子供ができそうにない以上、養子であるディアウスのみが二人の家族だった。なにしろ、二人には父母兄弟姉妹がまったくいない……らしいのだ。『らしい』というのは、そういった血縁関係を問われた時、二人はこの問いに必ず沈黙を押し通すので、はっきりとした事がわからないという意味である。ただ、二人に自らの血縁者を紹介された事はおろか、説明されたことすらない以上、何らかの理由で彼らと絶縁状態にあるのは間違いない。さすがに『実はこの夫婦はこの世界の人間ではないのだ。悪の狂王マルドゥックを倒す革命初期において、資金不足に悩んだ伝説の勇者ファイマテッラが異世界から召喚した出資者なのだ。だから、二人には血縁者がいないのだ』という噂は物心ついた頃に

は信じなくなっていた。とはいえ、父母に血縁者がいないのに、何か事情があるということには察しが着いていた。

いや、つまり、なにが言いたいのかというところ——少女はディアウスにとっての初めての友になる（かもしれない）ということなのだ。

普通、ディアウスのような子供にも兄弟、従兄弟の類との付き合いがある。だが、前述の理由から、ディアウスにはそれがまったくない。勿論、ディアウスの家ほどの富豪ともなれば、自宅に大量の奴隷を保有しているし、自由人の中にも円滑な仕事のためにと住み込みで働いているものが少なくない。とはいえ、主人の息子であるディアウスに対し、彼らは距離を置かざるをえない。生活空間も分かれている。そもそも、彼らは奴隷であるにせよ、自由市民であるにせよ、皆成人であるという点で、幼少のディアウスとは大きな隔たりがあった（さらに言えば、父ラフマーンは幼少期のディアウスを人目にさらすことを極力避けていた節がある。誘拐などへの対策だろう。当時の治安はそれだけ悪かったのだ）。

しかし、少女は違った。戸籍年齢では同年であったし、実年齢でも大差はないだろう。ほとんど初めて出会う同世代の人間といってもよい。何より、仮にも帝国丞相たる祝融からの要請で預かった少女である。粗末に扱うわけがない。ラフマーンが少女に用意した待遇は「ディアウスとまったく同様のものを」であった。この言葉の裏には複数の家庭教師と大量の奴隷、何より過保護な母に育てられたディアウスの集団適応への不安、そして、友と呼べる者がいない幼子への気遣いもあったのかもしれない。

そんなわけで、少年は少女と日常生活の多くを共有することになる。そして、そのことを聞いたディアウスは未知への興奮に心を躍らせた。その上、腕まくりした母に浴場バスマムに連れで行かれ、徹底的に身体に染み付いた汚れを落とし、その髪を梳られた少女は一変していた。おんぼろ少女も実は綺麗だったのだ。幼いディアウスは母さんの次くらいに綺麗だと思ったくらいである。

灰を被ったかのような埃の奥から出てきたのは、水面に映える月の如き白い肌。
着替えさせられた清潔な衣服が包んでいるのは、儂さを匂わせる程に細い手足。

その後ろで束ねられているのは、母に丹念に梳られたことを差し引いても、驚くに値する闇色の髪。その幾千幾万の夜を重ねた如き髪は、まさしく流れる水の様であり、少年の心を驚掴みにしたのだった。

……まあ、後になって考えてみれば、実際の彼女はディアウスが思った程の美少女とはいえなかったはずだ。大人になった彼女がそれ程の美女でない事からも鑑みるに、それは『家族が一人増える』『同い年の少女が来る』という興奮による錯覚が大きかったのだろう。少なくとも、容姿において、彼女を上回る女性などざらにいるのだ。しかし、同時に、同世代の少女（まして東方出身オリエントという珍しい少女）と付き合う機会などこれまでなかったディアウスにとって、その時の想いこそが紛れもない真実であった。

さらに言えば、少女本来の屹然した気質が、母の手で身なりを整えられること——素朴な美しさの黒に染まった外衣アバヤに身を包むこと——で、表面化したということも、彼女を綺うつくしく麗しくみせた一因だろう。小さな少女があつた蛇の如き笑みを見せた唇の薄い朱を固く閉じ、背筋を真っ直ぐに伸ばしている様を見た時、父母は少女が厳しい躰を受けてきたのだろうと感心した。幼いディアウスですら、どこか圧倒されていたのを覚えている。

それだけ、その少女は、幼さに反し、その举措は大人びていた。透徹とさえしていたのだ。

さて、この諱いみなを翦あという少女、この頃、号はおるか字あざなも氏もなかった。

一応、この少女は姫姓もしくは風姓ということになっているが……とりあえずは、その頃、誰もが呼んでいた阿翦あせんという小字こあざなを以つて、今しばらく話を進めることとしよう。

数年の後、書齋の中で少年は少女に問いかけた。

「ねえ、阿翦。唯一絶対と全知全能って、相反する概念なんじゃあないかなあ？」

「何よ、藪から棒に……」

口ではそういったものの阿翦はこちらに反応した。それだけでディアウスは嬉しくなった。このどこか超然とした少女が聞く価値のある言葉と判断したのだ。流石に読みかけの本からは眼を離すことはなかったが、それはやむをえない。

阿翦は瞬く間にアツザフル語の読み書きを習得した。その上達の早さには誰もが目を見張った。もう、自分よりも上かもしれないとすら、ディアウスは思う。見た目はぱっとしないディアウスも、実はそれなりに頭がいい。ちよつと抜けているところが多いが、その聡明さは教師達が皆認めるところだった。ついでに負けん気も強く、自らの知性に幼いながら、それなりの自負を抱いている。そして、未だ推定十歳前後とはいえ、ラフマンが金に糸目をつけなかった教育環境は、その自負を裏付けるに十分なものだった。そんなディアウスが白旗を揚げるのだから、阿翦の知性は実に抜kindでたものがある。

そして、読み書きを覚えた阿翦は暇さえあれば、父の書齋に閉じこもるようになった。ディアウスも外で走り回るよりも、家でゆっくり本を読む方が好きな子供だったが、阿翦には及ばない。用事のない時など、彼女は日本を読んでいた。両親は自分達にもう少し身体を動かすようになって欲しいと語っていた。しかし、阿翦と一緒に書齋にいる時こそがディアウスにとっては至福の時だった。

さて、その阿翦だが、彼女の読書には少々常軌を逸しているものがあつた。なんとというか（ディアウスもたまにそういうことがあるので、あまり人のことを言えないが）中毒的なのだ。眼を真っ赤にし、外界との関係を完全に遮断して、読書に没頭する。それが食事や授業

の時にまで及ぶ。流石に前者はラフマーンに注意されれば中断するが、後者は教師に注意されても「先生がここに書かれている以上のことを話されているのなら、私は喜んで耳を傾けますよ」とのたまいやがる（教師の方は阿翦の授業態度を契約違反だと非難し、阿翦は授業内容の非充実こそが契約違反だと反論し、そのまま二人で討論を始めた。一人、取り残されたディアウスには心なしか二人が活き活きしているように見えた）。一応は阿翦も敬意を払っている教師が相手ですら、こんな調子なのだから、ディアウスに対してはもつと辛辣である。読書中にかつに声をかければ、よくて無視。さもなくば、阿翦は蛇のように睨みつけ、ディアウスを蛙のように怯えさせる。ディアウスは気位こそ高いものの、気弱な少年だ。故に阿翦に睨まれるとついガタガタ震えてくるのだ。

逆に今回のように読書を中断させてまで応じてくれるということは、自分の言動が少なからず、彼女の心をとらえたということだ。いや、ひよつとしたら、単に今読んでいる本がつまらないというだけかもしれない。実際、彼女の片手は赤く丸々とした赤茄トマト——という父が仕事で手に入れた変わった野菜——を弄んでいた。阿翦はたしかにこの赤茄トマトが好物だったが、読書中に食べ物を弄るのは珍しい。いまいち、ほんの中身が面白くない証左ともとれる。しかし、それでもいいやと思ってしまうのがディアウス少年であった。

「いや、父さんのよく言う唯一絶対で全知全能の神って、小説の書き手みたいなものなのかなあと思ってる」

それはいかにもこの年頃の少年らしい発想だった。しかし、この頃、阿翦もまたやはり少女だったのだろう。ディアウスの考えを笑う事もなかった。

「……神はこの世界を書いている作家だと？」

「うん、それなら、この世界において全知全能でしょ。それに父さんがよく『唯一の神が運命を決めている』ってさ」

「……そういえば、アツザフル語では『筆は取り上げられ、頁は既に乾いている』という慣用句で『既に決まっている運命である』ことを示すことがあったわね」既にべらべらとアツザフル標準語ハを話すようになっていた阿翦だが、未だ夏語シヤで考える癖を少なからず引きずっているらしい。「それで、言いたいののは？」

「つまりさ、全知全能の神というのがこの世界を書いている作家なら……」

「作家というよりも、作家気取りの可能性が高いわね。絶対数から鑑みるに。まあ、この世界全体の情報量よりも大きな情報体であること以外は推論のしようがないけれど……とはいえ、我々の人格を書き綴っていることを鑑みれば、我々に近い精神構造をしているべきと考えるかしら？」

「うーん、じゃあ、とりあえず、作家モドキでいいかな」

「ええ、よろしくてよ」そして、話の腰を折ってごめんなさいと珍しく少女は少年に謝罪する。

阿翦が耳を傾けてくれることにディアウスは興奮してきた。

「その作家モドキはその作品たる僕らの世界に影響を受けないのかな？僕は日記をつける時、たまに脚色をつけちゃうことがあって、いつも反省するんだけど、後から読み返すとその脚色と事実が曖昧になることがある。これは僕の作った脚色という物語世界に僕自身が影響を受けるということだよ。まして、ずーっと物語を作っている人って、その物語に興奮したり悲観したりもすると思うんだ。自分の作った登場人物の生き様に感化される事だって、きつとある。つまり、僕よりも……」

「より影響を受ける。己が作った世界にね」阿翦はにやりと笑った。興が乗ってきたのかも知れない。「あなたは正しいわ。本来気弱な人間も刃物を持ってば凶暴になるように、人間は何かを支配すると同時に人間が何かに支配される。情報の流れというものが完全に一方通行だなんてありえないわ。それが高密度な情報の流れならば、なおのこと。創造主と被造物は相互干渉関係にあると思われるわね。……ただし、日記の例えは微妙よ」

あれでは別の意味が生じる。人が日記を付けることで、記憶に誤謬が生じるのは何も脚色だけが原因ではない。日記というものはその名の通り、『日々を記す』、すなわち文章化作業である。文章化とは言語化であり、記号化である。自らの記憶という曖昧模糊としたシロモノを、自らの限られた語彙で表現し、確定化しなければならぬ（これは曖昧模糊であるが故に多彩な可能性を秘めている記憶という存在を、確定的であるが故に極めて少ない、あるいはたった一つ可能性しか見せない記録という存在へと、可能性の幅を集約、減衰させる行為なのかしれない）。それは自らの記憶を定義づけ、論理化するという一面を持っているが、未だ属性（？）の定まっていない記憶を限られた語彙の中から選ばれたに過ぎない単語の属性に矯正するという一面もある。……と、この様にこれはこれで興味深い論題であるが、もし、『唯一絶対と全知全能は相反する概念である』という命題に集約して、論理を展開させたのであれば、いたずらに場をかき乱しかねない発言であるかもしれない。

「……と、思うのだけでも？」

「うん」素直にディアウスは頷く。「気を付けるよ」

「ま、どちらかというと、話の腰を折りがる私の幼児性のほうが問題かもね」そして、阿翦は苦笑した。「とにかく、話を続けて……」

「えーと……」

『唯一絶対と全知全能は相反する概念である』についてよ。影響を受けるということはその時点で『唯一絶対』ではない、と繋げるつもりだったんじゃないか？

「そうそれ」さすがは阿翦だとディアウスは思った。「この場合、僕は『全知全能』というものを想定できたわけだけど、それは同時に『唯一絶対』の否定にも繋がっていたわけで……」

これはその双方を兼ね備えているらしい父さんが信仰している啓典に出てきた『唯一の神』存在の否定に繋がらないかなって、思ってた

というか、《全知全能》は比較的容易に想定できるが、《唯一絶対》がいまいち想定できないとデアウスは付け加えた。すると、阿翦はその口を丸くポカンと開いた。

「……というか、あなた、あれに書いてあることを真に受けているの？」

「なんだか、阿翦の言っていることがよくわからなかった。阿翦はどんなのだと問い返すと、少女はなんとも言えない微妙な——困惑だろうか？——表情を経て「少なくとも、小父さまの様に読む気にはなれない。距離を置きたいと思うわ」と答えた。

「それと《唯一絶対》だけ……想定できないこともなくてよ」

「本当？」

「ええ。ただし、《唯一絶対》の想定を先行させると、《全知全能》については有名無実になつてしまふけれどもね」

「……………」

『何もしない』(ここそが神の絶対性を保障するということよ。いえ、その絶対性故に『何も出来ない』というべきかしら?)

「……………ごめん。言葉を補って」

「仮に絶対神が絶対善をその属性として備えるならば、その善性は誰にとつても理解できるものでなければいけない。でも、例えば甲と乙の利益が相互衝突を起こしている場合は？」

その場合、甲にとつての利益は乙にとつての不利益であり、その逆もまた、真である。両者の間に共通する文化的フォーマットが存在するならば、善性というものは《道徳》によつて、定まるだろう。だが、そのフォーマットが存在しない場合——世の中、特に超民族的関係、国際社会においての多くの場合は、両者共に自らの正当性を主張するであろうし、自らの利益となる行いが善となるであろう。では、両者にとつての神はどうすればいい？甲に肩入れすれば、乙にとつての悪となる。また、その逆も成り立つ。いずれにせよ、どちらかに肩入れすれば、善性が絶対でなくなる。そこで様々な宗教が語る神のとする手段は『どちらにも肩入れしない』ことだ。もし、神が本当に全知全能であるならば、もつといい解決策もある様にも思えるのだが——少なくとも、現実を見渡すとこういう傾向が強い。

「神というものはその守護対象が広がれば、広がるほど、はっきりしたことを主張できなくなる。まあ、これは神に限った話でもないんだけどね。精霊だって、干渉源であるヒト同士が接近すると、その間にいる精霊は二重契約状態になって、その指向性を失い、事実上無力化されてしまうでしょう？」

「うん。だから、ヒトは他人の体内の精霊に何かをさせることは出来ないんだよね」

「本人の同意なしには、ね。というか、それが出来ると大変よ。例えば、血管中に寄生している精霊に干渉して一定量の気泡を作らせるとかいう事件が多発したり……」

デアウスの顔が青ざめた。「そ、そんなことしたら……」

「死ぬわね、された奴は空気塞栓でぼっくりと。でも、それも先程言った理由で不可能だし、

そもそも、そこまで近づいたら、刃物を使った方が早いかしら？もつとも、あなたには関係ない話だけだね。精霊に嫌われているから、体内寄生数も少ないし」

「……自分だって、そんなに精霊に好かれている方じゃないくせに……」

「でも、嫌われてもいないわ……と、また、話が逸れてきたわね。とにかく、この様に複数の人間を守護しようと思えば、自ずから無理が出てくる」

例えば、親が子供の服装について諭す時、子供が寒帯に住むのなら厚着をしなさいと諭すことが出来る。だが、熱帯に住む子供に同じことは言えない。親が寒帯に住む子供だけを相手にしている場合は、単純かつ明快に『厚着せよ』と命令できるが、双方の気候に住む子供を相手にする場合はそうはいかない。

「こういった点はある神が特定の文化域に属するものだけを対象にしていた民族神から、より広範な超民族的な普遍神と変化する過程をみるとわかりやすいわ」そして、少女は赤茄を弄ぶ手を止め、じつとその赤い表皮を見つめ始めた。「たとえば、私の故郷では、とある天照らす日輪の女神を祀っているの。最高神としてね」

「へえ、夏の国でも太陽って女性名詞なんだ」

「……複数の意味で異なるのだけど、まあ、いいか……」

阿翦の故郷は今でこそ一つの国ということになっているが、元々はもつと小さな邦の集まりであったという。そして、その小さな邦の中の一つがその女神（その女神は純粹な固有名詞的存在でなく、一般名詞的側面も強いのだが、ややこしいから今回はこの点には触れないと阿翦は語った）を祀っており、その女神を祀る民族が翦の故郷を統合することになるのだが、その過程でその女神が変容を見せたという。最初の頃、この女神さまは勝気で移り気で乱暴で横暴だったのだ。しかし、後にそういった人間的な刺々しい部分は余り語られなくなり、漠然と穏やかで慈悲深く、思いやりに溢れた聖母の如き女神になっていった。勿論、きちんと資料を紐解けば、人間的な部分も見えてくるのだが、そこまでするものは少ない。その女神は既に名前だけの存在になり、その具体的行動について語られることはなくなっているからだ。

「この場合、初期においては小さな一地方神だったのだから、人間的具体的行動は許容されたよ。その民族の倫理、道徳、感性にさえ、沿っていれば問題なかったんだから。だけど、最終的にその民族はそれなりの広域統治者となった。故にあつちにもこつちにも気を使わなくちゃいけない。彼らが祀るその女神も。そのために他の民族の反発を買い、機嫌を損なうような部分は避けられるようになったのでしょね。そして、それを繰り返せば、やけに象徴的で曖昧な女神の姿だけが残るわけ……もつとも、私もあつちにいた頃は物心がはっきりついていたわけじゃないから、誤謬も多いだろうけど」

「そういえば、夏の国の《天》とか《天帝》と呼ばれる存在も具体性、人間性が薄いね」

——あれ、それじゃあ、阿翦の故郷って夏国ではないのか？

という考えが少年の頭をよぎった時、少女は《天》の思想について補足した。《天》は、国家統合の過程で、というだけでなく、元々、近隣の大陸遊牧民、すなわち国際的要素が強い社会から、輸入された思想であるということも一因だろうと付け加えたのである。

「同じことは、小父さまの信じる《唯一の神》についても言えるわ」

「えー、だって、あの神さまも結構横暴だよ」

「ええ、特に《五書啓典》^{タウラート}ではね。でも、よく考えてみて、《五書啓典》^{タウラート}は小父様が最も重んじる《第一啓典》よりも古い資料よ。つまり、小父様自身の信仰する宗教の原型となったものの資料であるとはいえないかしら？」

「あ、そっか。で、その段階ではまだ民族宗教的色彩を残していて、後により普遍的な超民族的宗教になった。前者の段階での資料が《五書啓典》^{タウラート}で、後者の段階での資料が《第一啓典》^{タウラート}である？」

「ええ、そして、小父さまは後者を信仰している。ただし、その原型たる前者も重んじていると……もつとも、こちらの変遷は私の故郷の女神程には国家統合との関連性は強くないだろうけれど」

「でもなあ。それでも、横暴っぱいけどなー、あの神さま」

「たしかにね。でも、それをどの程度の人間が理解しているかが問題よ。私たちは《唯一の神に帰依するもの》^{タウラート}といえ、すぐに小父さま、ひいては小母さまを思い浮かべるけど……あの二人は多分信者としては凄く熱心な方よ。だって、小父さまなんて、啓典の類を丸暗記しているもの」

しかし《唯一の神に帰依するもの》^{タウラート}が皆そうであるとは思えない。もし、そうなら、識字率がとんでもないことになるだろう。つまり、あの二人と違い一般の信者は啓典を丸々読んではいけないはずなのだ。だから、その横暴さが目にはつかない。逆にラフマンほどの信者ならば、信仰ゆえに目に付かない。

「加えて、小父さまが啓典から引用する時、大概それは理に適っていることよね。無意識のうちにあの神さまの横暴な部分に眼を瞑っている。私もあなたも字が読めるから、そこに気づくけれど。そうでなければ、より理性的、普遍的な……悪く言えば当たり障りのない……部分だけが抽出されてしまうんじゃないかしら？」

いずれにせよ、その神もやはり何も出来なくなる。全知全能だろうとも、肩入れは許されないから、何も出来ない。しかし、それ故に唯一絶対が保障される。言ってみれば、自然法則のように公平な、ただし非人格的な存在になる。

「自然法則……？」と、自分の言葉に気付かされたらしく、阿翦は繰り返した。「法則……なるほど、絶対とは法則であるか。あの《唯一の神》^{タウラート}だって最後の預言者以降、この世界へのはっきりとした干渉を行っていない。言ってみれば、世界を貫く法則のみを定めた存在、初期条件決定者に過ぎない」

阿翦は「あははっ！」と自らの思索の成果に思わず笑みをこぼした。ところが、ディアウスが「うーん、面白いし、概ね正しいと思うけれど……」と反論し、彼女は顔をしかめた。

「父さんの『唯一の神』を非人格的という辺りだけはちよつと承服できないな。大体、あの神さま、ああしろこうしろって、口うるさいよ」

「ま、まあ、たしかにあなたが正しいわね」忌々しげに頬を歪ませ阿翦は舌打ちした。「確認されている信者が小父さまと小母さまだけという宗教にかつに手を出して、憶測を続けるのがそもそも誤りかしら……」とぶつぶつ言い始めた。

「でも、因子というものが複合化すればするほど、没個性化するという考えは面白いと思う」言ってみてから、ディアウスは『うん、これはいい言だ』と思った。人生にはたまに凄い閃きが現れることがあるが、今がまさにその時だった。そして、「僕としてはそれもうちよつと自然哲学的な説明の方が受け入れやすいけどね」と補足した。

対する阿翦もその唇で口笛を吹き、その快心の言を驚きとともに評価する。

「自然哲学的な言い回し？……個々の分子は非常に乱雑な運動をしている不安定な存在にもかかわらず、それらが複合化された我々が視覚的に認識しうる物体は一樣に静止し、安定している……とか？」

「うん、確率論と絡めても面白いと思う」

微笑と共に返した少年の言葉に少女はしばらく瞑目した。そして……。

「……じゃあ、あえて私は人文哲学的説明を続けましょうか」

……と言った上で、まず、政治上の決定で多数決をとるとよくも悪くも中庸な意見が残ることや、一人一人を見れば非常に個性的な人間であつても、それらが何千、何万と集まれば、均質な民族性というものが現れること、また、そういった集団化によつて現れる文化や文明というものには常に幾つかの普遍的な共通項が見られることを挙げ、大いに少年を納得させた。そして、その上で、先程のディアウスの作家と作品世界について持ち出した。

「あれ、作家モドキじゃなかったっけ？」

蛇の如き阿翦の睨みに思わずディアウスは口を閉じた。

「作品世界の登場人物というものは現実の人間よりも往々にして極端な性質を備えることが多い。それは何故？」

「そりゃ、寓話だからじゃないの？」

「勿論、それもあるわ。でも、その作品が寓話的傾向よりも小説的傾向が強ければ？」

「そりゃ、演出だからじゃないの？」

「勿論、それもあるわ。ただ、作家という一個の人格の断片にはその断片の複合体たる作家そのものよりも、より極端な性質が備わっているから……とは考えられないかしら？」

「ああ、作家自身の凶暴な部分の具象化としての甲とか温厚な部分の具象化としての乙……みたいな？」

そういえば、作品世界に自らの（特に極端であることの多い）記憶や経験、知識の一部を盛り込むと主張する作家は多い。と、いうか、究極的にはすべての作家はそうせざるをえないだろう。自分の知らないことをどうやって書けというのだ？できるわけがない。そして、人間の人格というものは記憶や経験、知識の複合体である。

「そう、つまり、私達はこの世界を書いている奴の中にある——いい？そいつ自身が具えている必要はないわ。そいつの中にある知識や記憶に基づく存在でもいいのだから——個々の極端な特定因子を抽象化された存在であり、逆に言えば、この世界を書いている奴というのは、私やあなた、小父さまや小母さま、かつての狂王マルドゥックや勇者フアティマ、あるいは私が名も知らぬものたち、山川草木禽獣虫魚風雲雨雪日といった万物、そして、それらが織り成す森羅万象の悉くを何らかの形で、己の一部として備えた複合体であるということよ」

「なるほど……」

「そして、その複合体の一部に過ぎぬ私やあなただって、その内面には多くのものを抱えている。そして、それらの複合体としての我々は、我々の中にある様々なものに比べれば、相対的に没個性的、平庸なはずよ」

ディアウスは首肯する。たしかに心の中では思い切った行動をとろうとしても、実際の行動はそれ程大胆なものにならないことはよくある。それは思い切った行動をとろうとする己の一部が、慎重な己の一部や臆病な己の一部と複合化すること（そして、その複合化によって成り立つディアウスという存在の行動は）平庸なものとなるから——と、説明することが出来る。

「我々一人一人程度の情報量ですら、こうなのだから、この宇宙すべての情報の複合体たる《唯一の神》はきっと恐ろしく平庸な存在になるわ。そこまで、平庸になった存在が何らかの具体的な行動を取るかしら？いいえ、取らないわ。取ったとしても、私達に認識できるほどの個性的な行動ではない。当たり障りのない、日常の当たり前の存在となり、現象となってしまう。故に《唯一の神》は事実上初期条件決定者に過ぎない」

ただし、それでも、それらすべての因子は内包しているのだから、唯一絶対と言えないこともない。もつとも、自らの心を思うがままに出来ない人の身から思えば、それが全知全能といえるかは怪しいが……。

「つまり、《唯一の神》というべきものの在り様は、この宇宙を見渡せば、それはその莫大な情報量故に……私達の視点からすれば……何事も為さざるものとなった……」

そこで、阿翦は少し——まだ、アツザフル語に慣れていない頃の如く——口ごもった。

「……そうね。さしずめ《浮きし脂の如くして、くらげなす漂へるもの》である可能性が最も高いわね」

「さしずめ……何？」

「私の故郷の神話からの引用」

そう言って阿翦は赤茄トマトを齧る。すると、その果実からは赤い液体がこぼれ、少女の手を汚した。「うーん、やっぱり葡萄酒と違って、咽喉を潤すのには向いていないわね」

そう言いつつも、阿翦はこぼれた赤い液体を実に気分よさそうに舌で舐め取る。その光景を見ていたディアウスは何故かドギマギし、そして、一つの結論に達した。

「ねえ、ひよつとして、阿翦は血を啜りたいの？」

「……あなた、私に幻想抱き過ぎ」

「え、じゃあ違うの？」

無邪気に問いかけるディアウスに対し、もの凄く呆れた笑みを浮かべる阿翦

「……では、小父さまから、《イーサーの血》を貰ってきてくれるかしら？」

「えー」

ディアウスは渋る。《イーサーの血》というのは葡萄酒を指す隠語である。以前、阿翦から聞いたときにその意味がわからなくて、父に尋ねたら、長々と酒精の害について語られた。

……《唯一の神》は酒を博打や偶像、占いなどと同じく「悪魔シヤイターの業なので避けよ」と説かれておられる。何しろ、あれは判断力を喪失させ、脳細胞を破壊する大変危険な薬物なのだ。特にお前のような幼子が相手ならば、なおのこと。勿論、薬として、正しく用いれば、病の時に活力を取り戻させ、また、寒い時に身体を暖めることができる。そうだ、消毒や火薬の代わりにもなるな。だから、唯一の神は「酒と賭矢は大きな罪悪であるが、利益にもなる」とも、説かれている。うむ。まこと、唯一の神の言葉に間違いはない。しかし、同時に「だが、罪悪の方が利益より大きい」と説かれている。先程の例はあくまでも、特殊な事例だということだ。平時にわざわざ酒を用いる必要などない。そもそも、ディアウスよ、そのような悪魔の業を口にするとはどういうことだ。しかも、言葉を変えて取り繕おうなどは、その様な歪んだ性根の男に育てた覚えはないぞ。……うんたらかんたら。

勿論、この帝国で父の様な考えの持ち主は少なく、酒は重要かつ正当な嗜好品である。だから、父も商売の一環として酒精を取り扱っていいし、住み込みで働いているものたちもよく嗜んでいる。また、ディアウスや阿翦が風邪を引いた時には酒精を飲まして、体力回復を図らせることが多い。……ちなみにディアウスは苦いから酒が大嫌い、その際には全力で抵抗するのだが、結局、力づくで飲まされる。父自身は医者に進められても、宗教上の理由を盾に決して飲むことはないというのに、そういう時だけディアウスが《唯一の神》に帰依していないことを持ち出すのだ。あれはズルいと思う。

……いや、話がずれてきた。とにかく、そういうわけで、この屋敷にも酒は置いてある。だが、ディアウスや阿翦がそれに手を出すことに父がよい顔をするはずがない。

「そんなの、自分で頼めばいいじゃないか」

「嫌よ。私、小父様に嫌われたくないもの」

嫌われるとわかっていて、何故、ディアウスに頼むのか——とは思わなかった（いつものことだ）。むしろ、傍若無人な阿翦が嫌われるのが嫌だと言った事に驚いた。

「どうして？」

「玉の輿というのも……」クククと少女は微笑む。「……いいものだと思わない、ディアウス？」

ディアウスには訳がわからなかった。

こういう時だけでない。ディアウスにとって、阿翦は常に困惑の対象だった。

阿翦の言動がディアウスを困惑させるのは理解できる。例えば、件の翦の弁舌は幼い子供のものとはいえ、その内実は理神論や汎神論の一種だ。ならば、ディアウスが耳を澄ましたくなるのは当たり前だろう。言に圧倒され、困惑する——それは阿翦と相対した時のみではない。偉大な哲学者の言動や論理を聞く時、理解が及べば、身体が振るえ、及ばざれば、心が戸惑う——そんなことは授業でしょっちゅうだ。むしろ、そうでないの方が人間としてどうかと思う。阿翦に尋ねてみると珍しく素直にディアウスに賛同してくれた（いや、むしろ、『そうでない者』に対して、阿翦は露骨な辛辣さを表しており、その先鋭性は危険なものすらあった）。

おかしいのは阿翦の存在そのものがディアウスを困惑させることだ。上記の例にしても、その時の少女の言動よりも、その少女の醸し出す雰囲気困惑させられていた。酷い時になると、彼女が隣で昼寝しているだけで、ドギマギしてしまうのだ。

たしかに阿翦の言動に感心することは多い。ある種の尊崇の念も払っている。だが、寝ているだけの子供に、何故、自分は心を動かされなければならないのか？言動への敬意が恒常化し、その人格自体に敬意が付きまとうようになった——という考え方もあるが、寝ている彼女に人格性など、どれほどあるのだろうか？

しかも、ディアウスの眼が勝手に阿翦を追いかけている事まであった。それも一度や二度ではない。自律神経に異常でもあるんじゃないかと母に相談した。すると母は「まあ」と何故か顔を赤らめた上で、「その病はあたしには無論、どんな薬でも治せないものよ」と答えた。つまりは先天的疾患かと、一時は絶望的な気分になった。ところが、隣にいた父が「先天的要素だな。疾患や異常と呼べるものではない」と言葉を付け足した。すると母はキヤーキヤーと小娘の様に騒ぎ出した。いつもなら、「静かにしなさい」と注意する父も何故か顔を赤らめ（！）、黙ってうつむいたままだったから、さらに母はキヤーキヤーと興奮し、嫌がる父を無視して、夫の頬に接吻を繰り返した。

なんだかよくわからなかったが、両親が二人そろって、どこか遠いところに行ってしまったという事はディアウスにも理解できた。

いずれにせよ(ディアウスは優しい母の方が好きだったが、医学などの学術については父を信頼していたので)父の言葉を信じると、この感覚はあつて当然のものということになる。ディアウスは阿翦の側にいると常に緊張し、なのに離れようとすると今度は落ち着かなくなり、睨まれるとすぐみあがつて動けなくなってしまうのに——これが本当にあつて当然の感覚なのだろうか。

いや、そんなはずはない。どう考えても、重大な疾患ではないか。少なくともディアウスは不便なことこの上ない。

その上、阿翦はディアウスの側においても全然平気らしい。実に不公平な話だ。自分はこんな疾患を抱えているのに……。いや、それどころか、阿翦はディアウスのこの疾患を理解している節があつた。暇な時、いきなり顔を近づけて、その疾患を発現させ、嘲笑するのだ。猫に弄ばれる鼠の気分がわかつた気がした。ちなみに反撃を試みて、自分から顔を近づけてみたこともあつたが、結果は阿翦の透徹した表情とディアウスの疾患の発現のみだった。

しかし、その疾患が阿翦の側にいないと発現しないということは……。これは、やはり、あれだろうか……。要するにディアウスにとっての阿翦が……。やはり蛙にとっての蛇みたいな存在であり、この困惑は何らかの危険信号なのだろうか？

——いや、違う。蛙と蛇は種として違う。しかし、僕と阿翦は同じヒト科ヒトだ。なにも違いなど……。いや、肌の色が違うな。

しかし、ディアウスの如き南方人も阿翦の如き東方人も十分交配可能だ。しかも、生まれる子供は一代雑種ではない。つまり、南方人と東方人は同じ種であり、互いに亜種の関係にあるのだ。たしかに亜種間においてはそれぞれの形質に差が生じることがあるし、また、そういういった形質の相互作用によって、こういういった現象が生じうるかもしれないが……。しかし、所詮は同じ種だ。そこまで、極端な差異が生じるだろうか？ 一步譲って、それが仮にあつたとしても、ヒトの様に極めて後天的要素が大きい生物ならば、それこそ、精神的な個性の及ぼす影響の方が、亜種間の形質差に基づく相互作用よりも、はるかに大きい気がしてならない。しかし、父ははつきりとこれは先天的要素と断言した。

他にディアウスと阿翦の先天的相違点といえば……。雌雄の差か？

——うん、ありうる。

男女の差は体内で分泌される化学物質で決定する。ディアウスの読んだ本にはそう書いてあつた(四十六番目の染色体はこの頃まだ発見されていない)。そして、人間の精神は電気化学的なネットワークによって形成されている。そして、そのネットワークに化学物質は多かれ少なかれ影響を与えるはずだから、雌雄の差は精神構造の差に繋がるはずである。そうか、その差がディアウスの方にこういつた精神疾患を発現させている原因なのか……。！

——それに、男の人と女の人って、身体のもちよつと違うしなあ。身体という端末の種類が違えば、フィードバックも自ずから違ってくるだろうし、そうするとフィードバック

クによって、形成される精神にも影響するはずだ。

何より、これに似たような事例をディアウスは知っている。蟻螂の交尾だ。

——たしか……雌は雄を惹きつけてやまなくて、だけど、雄は雌が怖くて、だから、こっそり後ろから近寄るしかない。そして、それがうまくいけば、雄は雌に触れられるんだけど、その後、雄は雌に食べられちゃうんだ。雄が雌に触れられなくても、やっぱり、食べられちゃう。雄は雌に惹き付けられたら、その瞬間から、運命が決まっちゃう。雌に触れられても、触れられなくても、雄は絶対に雌に食べられちゃうんだ。

何だか、背筋が冷えてきた。雄の雌への惹き付けられ方と、ディアウスの阿翦への惹き付けられ方は酷似している。哺乳類であるヒトと昆虫である蟻螂——脊椎動物門と節足動物門、それぞれの進化の最先端にいる二つの種を単純に比較するのは問題かもしれない。だが、同時に収束進化による相似器官のようなものと考えられないこともない。

……ということ。

——……僕は……食べられちゃうのか……？

何だが、手足が震えてきた。そういえば、授業で蛙の解剖実験をする時に、臆病なディアウスはよく血の気が引くのだが、阿翦はむしろ嬉々として挑んでいる。学求心もあるだろう。それはわかる。それはディアウスにもある。だが、阿翦のように返り血を浴びたときに笑ったりしない。ディアウスは眼を瞑って怯える。そして、あの阿翦の微笑を見る限り、同じように人肉を捌く位、平気で……いや、むしろ、喜んでやりそうだった。

——で、でも……お、女の人って……み、みんなそうなんだろうか？

ディアウスが最初に思い浮かべた『女の人』は母ヌーラだった。ディアウスの知る限り一番綺麗な人で、ディアウスが一番好きな人。優しく暖かい淡い光の、まさしくその尊称たるヌーラ白い光の如き人だ。得体の知れない闇の如くどす黒い阿翦とはまるで違う。とても、母が阿翦と同類とは思えない。

——そうだよ。大体、母さんが男の人を……例えば父さんを食べちゃうなんて事があるわけがないじゃないか。……阿翦なら、やりそうだけど……。

そういえば、阿翦は時々、遠くからじっと父を見つめていることがある。あれはひよっとすると、父を食べてしまおうと阿翦が色々と算段を立てているのではなからうか？

——い、いけない。父さんが食べられちゃう……！

阿翦がディアウスに手を出さないのは、父を貪り食うまで、余計な騒ぎを起こさない方針なのだと考えれば、つじつまが合う。彼女に近づくだけで、時々動けなくなるディアウスは既に阿翦の手の中にある。鼠を弄ぶ猫のような阿翦の態度は『よし、こいつはとりあえず放っておいても大丈夫』という確認のためではなからうか？

——な、なんとかしなければ……でも、どうやって……？

阿翦に対し、果てしなく無力な自分に何が出来るか？注意を喚起するにしても阿翦は頭が

切れるし——と、そんな風に少年ディアウスが思索を巡らしていた頃だった。

皇帝直属の学術機関≪ウルル≫が設立されるという噂を耳にしたのは。

そのウルルに行きたい——と、阿翦が珍しく父におねだりしているのを聞いたのも。

その瞬間、ディアウスはぼんやりした気質をかなぐり捨て、十を超えたばかりとは思えぬ聡明さを全開にした。蓄えていた小遣いと父の人脈を利用し、帝都の役人を舌先三寸でごまかし、本来保護者の同意が不可欠なはずのウルルへの入学書類を集めた。

父が用意するよりも早く。

勿論、二人分。

試験はかなり難しかったが、それなりの自信はあった。ディアウスは阿翦と共に中流階級向けの私塾にも通っていた。勿論、既に二人には何人もの優秀な家庭教師が付いている。しかし、集団生活を学ばせておきたいというのが父の教育方針だったのだ（本当は下層階級向けの方が父の希望には沿っていたらしいのだが、養父であるラフマーンの地位を鑑みれば、どうしてもディアウスや阿翦の誘拐という危険が出てくるので断念したらしい）。そして、その私塾において、ディアウスは常に阿翦と主席争いをしてきた。その私塾とて、高水準の教育内容を誇るところだ。周りにいたのは皆、各地で俊英と呼ばれたものたちだったし、しかも、ディアウス達より五つは年上だった。神童と呼ばれる度に赤面し、否定はしていたものの、悪い気はしていなかったディアウスが確実にそこにいた。

そして、ディアウスが当然の様に合格通知を受け取った時、父は少し難しい顔をし、母は子供のようにはしやぎだした。

「いいですか、二人ともウルルに行っても仲良くするんですよ」月並みだが温かい言葉を母は二人の子供にかける。「これからも机を並べて学ぶことになるのですから」

ディアウスは素直に元気よく「はい^{ナム}」と答えた。だが、阿翦の答えは異なっていた。

「無理^ラです」

ヌーラとディアウスは母子そろって、首を傾げた。

「私が合格したのは大・学・府の方だから」

齢十二の少女は何事もないように答えたのだった。

ディアウスがよく見ると、自分の合格通知の後ろの方には『小・学・府三百六十五名中三百六十四位』と記されていた。

^{ワシラ・アルマル} 帝国丞相たる祝融が共も連れずに訪ねて来たのはその日の夜、ちょうど夕餉の時間のことだった。

実は彼女がラフマーンに会いに来る事はしばしばあった。が、予告もなしにいきなりというのは珍しい。馬や駱駝もないし、もしや、走って来たのかと使用人たちが訝しむ。だが。無言の祝融はつかつかと阿翦とディアウス、父母のいる食卓にまで上がりこんできた。誰も止めはしなかった。彼女は易姓革命の際には古の破壊神共工を打ち破り、一撃で万の敵をも屠る火柱を操ったとされる巫術師である。いや、それだけではない。五年前と異なり、この帝国は既に中原の覇者として万民に認められている。そして、彼女はその帝国を実質的に動かしている権力者なのだ。無礼を窘めるなどもつての他。反射的に自分達の方が礼をとる一家である。

ただし、一人だけ例外があった。阿翦である。

「やってくれましたね……翦」

それはアツザフル正則語ではなかった。彼女たちの母語である夏語^{シャール}だった。

周囲にざわついた空気が流れた。もしや、興奮しているのか？沈着冷静で通っているあの祝融が……。

「……で、どうなりました」阿翦は礼もとらずに尋ねる。

「『ウルル大学府への入学資格は満十八歳以上とする』の一節ですか？」祝融は表情を変えずに言った。「削除させましたよ」

「あら、ウルルは皇帝直属の学術機関だったのでは？」

「……私が進言し、陛下が許可なされました。年齢を理由に首席成績者を不合格とするのは余りにも惜しいと……」

拝礼していたディアウスは思わず顔を上げ「首席……？」と思わず言葉を漏らした。だが、側にいたラフマーンがすぐにその口と頭を力づくで抑え付ける。

「謝^{シヤエ}謝」

そこで阿翦は勢いよく頭を下げ、初めて拝礼を取る。そしてクククという笑いを堪えながら、「と、皇帝陛下に……」と付け足した。

祝融も「私を伝令に使うつもり？」と言いながらも、むしろ心地よさそうだった。

「しかし、書類はともかく、試験官がよく通しましたね」

「東方の女は幼く見えるものだと言って、信用させました。あなた様という前例がありましたし……」

唇をわずかに緩める阿翦の言葉に、傍目には阿翦と同一年にも見える祝融の頬が少しばかり歪む。「……とりあえず、その試験官の名を後で届け出なさい」

「相手の歳も見抜けぬ不注意と無能ですからね。減給はやむをえませんか……」

「あなたもですよ、阿翦。偽証の罪がなくなるわけではありません。罰金程度でしょうが、明日にでも警邏所に出頭しなさい」

「はい」

そして、祝融は結び上げて己の髪から一本、純金の簪かんざしを取り出し、「あなたの夕食と同じものを一人前売っていただけませんか？」とラフマーンに差し出す。

「いえ、客人をもてなすのに代価を受け取るのは……」

「あなたの誇りが傷付くのはわかります。ですが、帝国丞相祝融ワシラールの名において命じます。受け取りなさい。あなたの誇りよりも賄賂を取り締まる法の方が遥かに重要なのです」

完全に命令口調の祝融に対し、ラフマーンは諾々と従う。すぐさま、祝融の食事が用意される。使用人たちにしてみれば、大慌てであり、大急がしである。そして、その静かな喧騒の中、ディアウスは現状を徐々に理解しはじめていた。

つまり阿翦は、ウルルはウルルでもディアウスのように小学府に申し込んだのではない。大学府に申し込みをしたのだ。勿論、先程祝融が言った通り、阿翦もディアウスも年齢的に大学府への入学は不可能——だったはずだ。ディアウスもそれを知っていたから、小学府へ申し込みをした。阿翦には何も聞かなかったが、当然、彼女も同じように小学府への申し込みをしたのだとばかり思っていた。しかし、実際には彼女は大学府への申し込みをしていたのだ。おそらく、書類を偽造してまで……。

そして、阿翦は合格した。それも、首席で。だから、祝融がわざわざこの家にまで来たのだ。丞相の激務の中、彼女は帝国屈指の富豪であるラフマーンではなく、一介の少女に過ぎぬ阿翦に会いに来たのだ。

……その日の夕食には祝融がそのまま参加することになった。帝国丞相がいても尚、その主役は阿翦だった。日頃は無口な祝融とは思えぬ饒舌で、阿翦の知性と快挙、ラフマーンの陶冶と薫陶を褒め称えた。いつもなら、阿翦への賞賛はディアウスにとっても心地よいものであったのに、今日に限ってはなんだか耳障りであった。高級品である胡椒ペッパーをたっぷり使った五目御飯バエーリヤもまるで味がしなかった。

ウルルに真っ先に駆け上がってきたその少女に対し、共に夏の国の名を持つ者の誼もあり、丞相祝融は直々に氏を賜わすことにした。ウルルが帝国にとつての鸞翔鳳集の地として作られたことから、《鵬》という氏だ。いささか、大仰とも思える氏であったが、阿翦——いや、鵬翦はそれを恭しく受け取った。

「そういえば、あなたは今いくつくらいなのかしら？」

「戸籍では十二となっています。生理的にも大差はないと思います」

祝融が問いかけ、鵬翦が答える。首席合格の部分を除き、この部分だけを聞いても、その凄まじさはよくわかる。この頃はまだウルルが設立されたばかりで実例が少なすぎるが、後世では十代半ばからウルルの大学府に挑戦し始め、二十歳過ぎで合格すれば一流と呼ばれる。これと比較すれば、十二で合格した鵬翦の実績は甚だ突出している。にもかかわらず、鵬翦は当然のことだと言わんばかりの態度だった。

「そう、では、筭しうがいに及ぶにはまだ早いかもれませんね……」

「そうでしょうか、もう月の障りはあるのですよ」

「あら。では、既にあなたは女ですね」

おかしな所で幼子らしくムキになる鵬翦にあくまでも冷静な祝融。この部分はアツザフル語で話していたので、母ヌーラにも解せたらしい。その口から、軽い失笑がもれる。その和やかな雰囲気ディアウスは何故か苛々させられた（よく意味がわからなかったし）。

「ならば、いつまでも諱で呼び続けられるのはふしだらというもの。この際、あざな字も決めてしまっただけですか？なに、歳がいくつであれ、あなたは既にウルルの大学府に主席合格しているのです。子供扱いする者などいないでしょう」

鵬翦は事実上の保護者であるラフマーンに視線で問いかける。ラフマーンは「構わんよ。丞相殿の仰る通りだ」と答える。そして、下僕に紙と筆と墨を持ってくるように命じた。すると、鵬翦は目を瞑った。やはり、この少女といえども、自らの字を決めるに当たっては慎重を期したいらしい。

下僕がそれらの道具を少女の前に置いた瞬間、鵬翦は目を見開く。

「では……私の名は翦ですし……まだまだ、若輩という意味も込めて……」

そう言って、少女は筆を走らせる。

そして、荒々しい筆跡でこう書きあげた。

雛子——と。

その二文字を見て、ディアウスとラフマーンは驚愕に震えた（唯一夏語を解さないヌーラだけがきよんとしていた）。

——なにが若輩という意味だ……。なにが諱である翦との関係だ……。これで阿翦の氏字は《鵬雛子》。すなわち《鳳雛》の意ではないか！

これでは驕慢ととられてもやむをえない。戦慄すら覚えて、ディアウスとラフマーンは息を呑む。夏語を母語とし、その意味を最も深く理解しているに違いない祝融は、しかし、あの鉄面皮を崩して、薄く微笑む。そして、軽い諧謔を以って答えたのだった。

「女の子だから、鳳の方がよかったかもね」

結局、その日の夕食は穏やかな雰囲気と鵬雛子への賛美で終わった。一人の少年の心中を除いて……。

食事の後、いつの間にか祝融の馬車が迎えに来ていたので、彼女はそれに乗って帰ることになった。ディアウスは両親と共に見送りに出た。そして、彼女が馬車に足をかけたその時、ディアウスは思わず駆け出していた。

「あ、あの、年齢制限がなくなったのなら……僕もっ……」

舌打ちしたラフマーンが慌てて、ディアウスの外衣アバイヤの裾を引っ張った。「うわっ」と平衡を

崩して転びそうになったディアウスであるが、何とか持ち直して、顔を上げる。

祝融は汚い豚でも見るようにこちらを見ていた。

唐突にあの『小学府三百六十五名中三百六十四位』と記されていた合格通知が脳裏に浮かんだ。

大学府はその名の通り、小学府の上級学府であり、本来、小学府の卒業者のみが受験を許される。今回はまだウルルが設立されて間もないので、受験規約に『小学府卒業程度の能力の証明となる推薦状を以って、受験時に小学府卒業資格に代えることを認める』という一節が付け加えられていた。だから、鵬翦の受験が可能であったのだ。しかし、この一節はじきに削除される予定であったし、そもそも大学府受験資格は小学府で優秀な成績を叩き出せる実力者のみに与えられる性質のものである。

そして、ディアウスはその小学府で三百六十五名中三百六十四位だったのだ。

急に涙がこぼれてきた。ディアウスはそのまま無言で大地に崩れ落ちる。母ヌーラはそのディアウスの手足を無理やり伏礼に見えるように整える。父ラフマーンは祝融に謝罪を述べる。祝融は無言で馬車に乗って、そのまま去っていく。

一人屋敷の中に残っていた鵬翦は――多分、負け犬を見下す瞳で嘲っていたと思う。

* 承・後編

後になって考えてみれば、それはまったく当然の結果だった。

それまで、ディアウスは阿翦と肩を並べていた。私塾で、阿翦が首席を取れば、ディアウスは次席を取っていた。まれに阿翦が次席を取ることがあれば、首席は必ずディアウスが取っていた。ディアウスは阿翦と二人で、悉く首席と次席を独占していた。

だから、自分は彼女と同格なのだと考えていた。

ウルルへ足を踏み入れ、ようやくそれが思い違いであると悟った。

これまで、二人の間に目立った差がなかったのは、まだ、二人の習い、学んでいた内容が、とどのつまり、その程度だったというだけのことだ。

いわゆる『ちゃんとした教育』を受けている子供を想像して欲しい。

自然数の四則演算を理解できない者など、ほとんどいないだろう。それが整数全般の演算になり、さらに有理数全般の演算にまで発展すると多少差が生じてくるが、それは、小さな差に過ぎない。だが、話が実数全般に及び、さらに複素数全般にまで広がれば、それをさらに理解するものと、なかなか理解できないものの差は明確になる。

その差が、後天的な努力の差なのか、先天的な才能の差なのかは判別しがたい。しかし、同じ程度の教育を与えられていても、四元数を脳裏で処理できるものと処理できないもの間には埋めがたい溝があるのだ。

そして、四元数を自在に操れるものと、複素数の運用に手詰まるものの差は、自然数の四則演算を競わせている段階では見えてこない。後にディアウスは、幼い日に彼女との力量差に気付かなかつた理由を考える事になるが、おおよそ、このような結論に行き当たった（ここで数学を持ち出したのは、あくまでも喩えに過ぎないが、一人が純粹な『学生』だった頃、まだ、四元数は勿論、複素数の存在についても、学会で暗中模索を続けていたことも、二人の差異を表出させなかつた一因だろう）。

勿論、ディアウスもこれまでは阿翦以外を遙か下風に立たせてきた。それを鑑みれば、ディアウスの力量も決して軽くはないように思える。実際、幼い頃のディアウスは謙遜しつつも、それを自負とし、自尊としていた。

だが、歳を経るとそれすらも怪しくなってくる。その相対的な優越性は、先の例における初期条件たる『ちゃんとした教育』が与えられている者が、ごくわずかであったことに由来していたのだろう。そもそも、アツザフル帝国における識字率は狂王放逐、易姓革命の段階で一割にも達していないと推測される。つまり、この時代、教育とは現代とは比べ物にならない贅沢だったのだ。そして、それはディアウスと同じ私塾に通っていた者たちにもいえる。

つまり、経済的に教育を受けることが困難であり、日雇い仕事に励み、食べるものや着るも

のを削って金を造り、睡眠に当てられる時間を流用して、私塾に来ている者と、大富豪であるラフマーンの下、食べたいだけ食べ、寝たいだけ寝、着るものなど、母や使用人が勝手に用意してくれる中で、ぬくぬくと一流の教育を一日中のんびり受けているディアウスとは、そもそもその出発点が違う。その不平等の上で、ディアウスは他者より、一步先んじていたに過ぎない。

もしも、他の者がディアウスと同じ条件で、学業に励んでいけば、ディアウスこそが、彼らの下風に立っていたに違いない。ウルルに来てからの三年間、同じ様に習い学ぶ者たちと競い合う中で、ディアウスはそれを思い知らされた。いや、『同じ様に』とは言っても、ディアウスほど恵まれている者は稀だ。ウルルにいる者たちも、かつて私塾にいたものたち程でないにせよ、それなりの苦勞を背負っている。そして、そんなディアウスよりも遙かに不利な立場にいる者たちが、実力においては軽々とディアウスの上に立っている。

畢竟、ディアウスは井の中の蛙だった。

そして、鵬翦もまたディアウスと同じ井の中にあつた。

だが、その本性は蛙どころか、その氏字の通り、ウルルに相応しい鸞鳳だったのだ。

齡十六の少年の眼前に一人の男ラジユルがいる。

その名をミンガマツリラマという。

彼は西方の出身であり、金髪黒肌であつた。金髪黒肌は西方系の子供によく見られる形質であるが、幼少期を過ぎれば、往々にして、その髪は黒ずみ、黒髪黒肌となる。ところが、このミンガマツリラマは十を過ぎても、二十を過ぎても、尚金髪黒肌を保っていた。そのため、異形の奇人として、若い頃から世に知られていた。しかし、既に三十を過ぎた今、彼が世に知られるのは未だ残るその金髪黒肌故ではない。

彼こそが、狂王マルドゥックを放逐したアルルクドゥールの四聖アルルクドゥールの一人にして、その藜杖カムヌカの一振りカで台風すらも引き起こすアツザフル屈指の巫術師であり、何より運動の三法則や万有引力の法則を発見した世界最高の探究士ウラマーでもある。そして、彼は形式的とはいへ、このウルルの長であり、なおかつ、この少年の師匠シャイフでもあつた。故に欠伸と共に……。

「……………下らんものを読ませておつて」

と、少年が徹夜で書き上げた論文を一蹴することも多々ある。そして、ビリビリと少年の心そのものを引き裂く音を立たせて、その論文を二つに破り、四つに破り、八つに破ることも度々ある。

「俺の貴重な貴重な時間をこんな事に使わせるとは……」さらに今日のミンガマツリラマは解説不可能になった少年の論文をいかにも暇そうにくしゃくしゃと丸めた。「……貴様はそんなに俺が憎いのか？」

そして、あたかも籠球遊戯の如く、出来上がった紙球を高く掲げて、部屋の隅においてある塵箱に向かって投げた。

元論文現紙屑の球体はミンガラム自身の発見した法則に従って、放物線を描き、塵箱の中に吸い込まれるように飛んで行き……。

そして、最後にわずかに軌道がそれ、紙球は塵箱から外れた。

急に驚いた顔になったミンガラムは急いでその紙球を取りに行き、再び塵箱から距離を置いて、投げ込んだ。

……だが、やはり、あと一步というところで、紙球は入らない。

今度はゆっくりと何か考え込むようにミンガラムはその紙球を取りに行く。そして、三度、距離置くのだが、今回は投げ込む前にその紙球を何度か強く握り締め、より、完全な球体に近づけた。おそらく、空気との摩擦や重心のずれを抑えようとしているのだろう。さらにミンガラムは何やら、言霊を唱え、祝詞を紡ぎ始めた。聞いたことのない言語巫術であった。どうやら、大気中の精霊に干渉し、空気を形成する分子の密度をある程度薄めた『道』を作るようである。そこに紙球を通すことで、より単純な物理法則に沿った軌道を取らせ、より確実に少年の論文を塵箱に入れようという算段なのだろう。ミンガラムは『ふっ、勝ったな』と言わんばかりの笑みを浮かべ、紙球を放り投げる。……が、さすがに塵箱の外周に触れはしたものの、紙球は塵箱には入らず、床に転がった。

するとミンガラムは露骨に激怒し、癩癩を起こす。その外れた紙球に駆け寄ると何度も何度も踏み付けた。そして、最早跡形もなくなった少年の論文をフンと一瞥すると、大きく息を吸い、今度は机に向かい、椅子に座った。そして白い紙を広げ、その上に何やら、数式と図式を書き散らし始める。覗き込んでみると、どうやら、極めて軽い物体の空気中における放物線軌道に関する考察を綴っているようだ。

「……………あ、あの……………」

今まで、意識して抑えてきた表情と共に沈黙を守っていた少年はここに至ってようやく声を発した。

「……………なんだ。まだ、いたのか？」正真正銘、今気づいたという様子のミンガラムは煩わしそうに、シッシツと手を振る。「もう、出てけよ。お前、用無し」

「はい……………」

師匠の一言に弟子は従うしかない。気づかれないように拳を握って、少年は言われるままに部屋を出ようと足を動かす。ところが、少年が扉に手をかけた頃になって、ミンガラムはポツリと呟いた。

「あ、待って待って。そういえば、お前の親父、あの小娘ツァグの知り合いだったよな？」

ミンガラムには他者への配慮というものが存在しない。故にその言葉もわかりにくい。少年の父といえ、養父であるラフマン・イブン・イーサー・アル・イブン・アダームの

ことだろう。そして、そのラフマンとこのミンガラムの共通の知り合いである『小娘』フアクトといえは……。

「……たしかに父は丞相殿にも目をかけてもらっていますが……」

……帝国丞相たる祝融は既に娘シヤンバと呼ばれる年齢に達しているものの、たしかに見た限りでは幼女にすら思える容貌である。しかし、事実上の最高権力者である彼女を堂々と小娘フアクト呼ばわりするなど、普通は考えられない。が、ミンガラムはかつての革命において、彼女と肩を並べて戦っていた《建国アルムブテイウアルクンドルの四聖》の一人であり、今では《ウルルの長》であり、マルジャエニタクリド《帝国学会第一先導者》である。何より、根本的に奔放で無神経なミンガラムならば、丞相祝融といえども、その容貌の幼さのみを以って、小娘呼ばわりすることもあるのだろう。……そこまで、考えた上で切り返すのは少年には一苦勞であったが、ミンガラムはそんな苦勞など気にも留めずに好き勝手を言う。

「だったら、お前の親父經由フアクトあの小娘に言ってやってくんねえか？『馬鹿どもの相手は疲れる。いい加減、勘弁してくれ』ってな」

一瞬、これは嫌味なのかと疑ったが、すぐに思い直した。自分はそもそも嫌味の対象になるほど彼の興味を得ていない。それにこの男は虚飾を嫌う。頭の中にあるものは、一語一句違わずに口から出てくる。そういう師匠の性癖は何度も接さない内に弟子に伝わっていた。だから、これは紛れもなく彼の本音のはずだ。また、彼の要求にも一理ある。ミンガラムは探究士としては世界最高かもしれないが、教育者としては……まあ、その適性を疑わざるをえない。適材適所で言うならば、ウルルという巨大な学術組織の長など、すぐに止めさせて、十分な研究環境と共にどこかに監禁するのが賢明なはずだ。そちらの方が当人の希望にも沿っているだろう。

少年はそういった含意を読み取り、答えた。「ご自分で直接仰ってはいかがでしょうか？」

「ほう」ミンガラムはきよとんとした様子で、「二丁前に異見しやがるか」

「はい」

「だがなあ、俺からはもう何度か言っているんだよ。だが、耳を貸そうともしない」

だろうな——と、少年は思った。飾り物であっても、この男をウルルの長に付けることは政治的に意味がある。あの祝融が一度そう判断すれば、ミンガラムの個人的な不平など聞き流すに決まっている。

「しつこく言うフアクトと権力をちらつかせやがる」異形の賢者は自らの首を刎ねる動作をした。「だから、搦め手でいこうと思う」

「通じる相手ではありません」

「諦めるなよ」

「僕もあの人は怖いです」

「……役立たずめ」

吐き捨てるかの如きミンガ||ラマの物言いに、とりあえず、会話の対象としては認められたかと、皮肉な気分少年は言い放った。

「……そのために僕如きの論文に直々に目を通したのですか？」

しばらくの沈黙。怒らせたかと——少年は不安になったが、すぐに構うものかと自棄になり、無言を貫いた。すると、意外なことに……。

「……なるほど」くつくつと初めて興が乗ったようにミンガ||ラマはせせら笑う。「お前でも他人が気になるか……」

「……どういう意味です？」

「貴様はそれを超越したところにいるように見えたんだがな……」

今度はミンガ||ラマの言葉の意味を解せなかった。少年とて、まさか、ミンガ||ラマが祝融への言伝てのために自分を直弟子とし、論文に目を通しては思っていない。しかし、自分のように実績も実力も、そしておそらくは才能もない最下級の探究士にわざわざミンガ||ラマが接するのは、その祝融にすら影響力を誇る少年の父||ラフマーンが存在が作用しているのだとは思っている。つまり、先程の一言は、少年なりの嫌味のつもりだった。しかし、このミンガ||ラマの態度を見る限り、どうも、彼の心中には何か別の思惑もあるらしい。だが、その正体はわからない。するとミンガ||ラマは失望を隠すことなく、ため息をついた。そして、横柄に……。

「そうだ、アル||イクシルよ。これを《アル||シャイター・カパー・アスワド黒衣の魔女》に渡しておけ。それくらいしか、能がないんだからよ」

……と、少年を『アル||イクシル』と呼び、何やら封筒を渡した。小学府の中でも、最下級に位置する少年にはこの様に雑用が回ってくることも珍しくはない。

「……あの女ぐらいの生徒ばかりなら、弟子を持つのも悪くないんだがな」

「……丞相殿フエイトが小娘で、阿翦イムラアは女ですか……？」

年齢十六の幼馴染の顔を思い出しながら、アル||イクシル・ディアウスは素朴な疑問を口に出した。

アル||イクシルというのはディアウスの通称ラカフである。

ウルルに入ってから、彼はこの通称ラカフを用いるようになっていた。父に忌むべき偶像であるディアウスの名前イスマを唱えさせるのはいかなものか、という少年なりの配慮である。しかし、今更、マジヌーンの名を使うわけにもいかない。かといって、ラフマーンイブン||ラフマーンの息子という血称ナサフも父には禁忌かもしれない。そこで、新しいのを作ったのだった。とはいえ、先に字を決めた少女への幼稚な対抗心がなかったといえば嘘になるだろう。いずれにせよ、この物語の主人公は『アル||イクシル』と社会的に認知されるようになった。よって、この先はアル||イ

クシルの名を用いて、物語ることとしよう。

一方、ミンガラムの語った《アルシヤイターナ・カパー・ズワド黒衣の魔女》とは阿翦改め鵬翦のウルルにおける敬称であつた。いささか長い上に、仰々しいこの敬称には由来がある。

ウルルの所属探士的身分証明には神御衣が用いられ、これを以つて、制服と為し、また、式服と為す。

神御衣——すなわち、精霊結晶製繊維で編まれた衣服が身分証明に用いられると発表された時、多くのものが耳を疑つた。

たしかに祝融の制定した巫術師免許法による言語巫術に関する知識の一般開放、そして、ミンガラムの発明した珪素媒体式電気誘導法によつて、精霊結晶は帝国建国以前の様に上流階級の独占品ではなくなつた。だが、それでも綿や絹と同様に高価な代物である事に変わりない。いや、市場原理による価格修正を受けた結果、同じ重さの金銀との交換を求められることすら珍しくなくなつた。勿論、これは精霊結晶の輸出入を帝国が厳しく制限していることも一因であるが、それだけの価値が人々に認められているという証左でもある。

そもそも、いかに万能分子と呼ばれる精霊といえども、その生命活動を残しつつ、結晶化し、繊維化し、衣服として形成し、さらに安定させるにはそれ相応の技術と時間が求められる。ただでさえ、精霊結晶は高価なのだ。その上にこんな加工を施せば、その付加価値はさらに甚大なものとなる。

平たく言つて、神御衣はべらぼうに高い。故に偽造がまずありえない身分証明たりえる。しかし、人々を驚かせるのは、その神御衣がウルルの探士にはなんと無料で配布されていることだ。その総額がどれだけのものになるかは想像に難くない。鸞翔鳳集の地ウルル——その知的財産へかけるアツザル帝国の意気込みがひしひしと伝わってくる。

また、ウルルの神御衣にはいくつかの意匠と色彩の形式があつた。それが性別や階位、功績を示す役割も担っていた。そして、今、鵬翦が纏っているのは柄のない黒い、漆黒の法衣。アルヒカパー・アズワド・ムスマトそして……その《アルヒカパー・アズワド黒》はウルルの中でも最高位の証であつた。

皇帝直属の学術機関たるウルルで最高位の探士であるということは、このアツザル帝国で最高位の探士であることと同義だ。そして、アツザル帝国で最高位の探士とはすなわち『世界』で最高位の探士であることを意味する。それだけの重みがある

《アルヒカパー・アズワド・ムスマト漆黒の法衣》をうら若い少女が纏っているのには、無論、理由がある。

彼女は十四歳の時の二項定理の発見し、さらに虚数概念（複素数平面法）を提唱した。彼女は十五歳の時に微分を発見した。

……並べてみるだけで、その凄まじさがわかるだろう。

故に、鵬翦が《アルヒカパー・アズワド黒衣》授与者に認定された時、誰もが口を噤まざるをえなかつた。何しろ、これらの成果はどれ一つとっても、帝国にというよりも、人類にただならぬ貢献をして

いるのだ。その実績を鑑みれば、この《黒衣》に袖を通すことも、むしろ、当然といえる。アルリックバー・アズワド
だが、以後、数百年に及ぶウルルの歴史を俯瞰しても、この《漆黒の法衣》が若干十五の少女に与えられたなど他に例がない。勿論、この時点での前例などあるわけがない。だが、それに対し、誰も異を唱えることができなかった。それだけの力を既に鵬翦は示していたのだ。その力のみを以ってすべてを沈黙させたのだ。

だからこそ、彼女は《黒衣の魔女》と呼ばれることとなる。アルリックバー・アズワド

さらに言えば、アルリックシルなどは、鵬翦が《黒衣》だけでなく、《魔女》とも呼ばれる理由は単なる畏怖のみでないと考えている。むしろ、《黒衣》授与の決定打となった微分の発見はヒトが新たな段階へ、一步を踏み出したことを意味している。アルリックバー・アズワド

伝説の《ラプラスの悪魔》——ある瞬間に宇宙のすべての原子の位置と運動量とを知ること、未来永劫にわたる宇宙の運命を解析学によって知ることができる存在。微分の存在を知った時、異世界のとある探究士が提言したというこの概念を彷彿し、そして戦慄したのは、アルリックシルのみではあるまい。デックラ

たしかに、ミンガラムによる運動の三法則や万有引力の法則の発見により、事象の決定主体を自然法則に求める力学的、機械論的決定論は既に確立されつつあった。しかし、上記の法則の結果、すなわち自然現象の数学的表現として、導曲線を描くことはできるようになっても、今まではその曲線を構成している点の、一つ一つの厳密な接点を特定することができなかった。そのため、どんなに単純な自然現象であっても、定量化においては粗い近似しか、導き出すことはできなかったのだ。故にその単純な自然現象が重なり合った複雑な自然現象については、まったく予測不可能だったのである。

そして、鵬翦の発見した微分方程式はこの壁を、曲線を構成する一点の接線を特定することができないという障害を、見事に打ち破ったのだ。すなわち、人類は定量的な未来予測を可能としたのである。

このことに思い立った時、アルリックシルの身震いが止まらなかった。これは空想癖があるからではないだろう。何しろ、究極的には鵬翦の微分方程式が上記の《ラプラスの悪魔》をも生み出しうるのだ。ジンニー・アルリックブラリス

勿論、そのためには（仮にすべての事象に対応する微分方程式を悉く完成させたとしても）宇宙のすべてを計測、解析しきるだけの計算能力が必要となる。実際には、この惑星に住まうすべての精霊をこの作業に従事させても、明日の天気を予測できるかどうかすら怪しいだろう。いや、そもそも、この宇宙の中にある存在が、どうやったら、この宇宙すべての情報を処理できるのか、という問題も残っている。また、この時代は未だ電磁気学が黎明を抜け出せていないために、想定すらされていないが、後の不確定性原理の発見はその前提条件を丸ごと覆すことになる。

しかしそれでも、《ラプラスの悪魔》はその可能性を示唆されるのみで、世界に絶大な衝撃

を与えた。事実上の無神論者である探究士たちすら、恐ろしい禁忌の念と、それをほるかに上回る甘い誘惑を覚えさせた。なにしろ《ラプラスの悪魔》は《全知》である。《全知》により、この宇宙の《始まり》も《終わり》も掌握できる。さらにこの宇宙の《始まり》から《終わり》までのすべての物理現象を掌握できるのなら、蜻蛉の羽ばたきほどの力で、大地の裏側に台風を発生させることも可能かもしれない。それこそ、この宇宙のすべての事象を制御する能力……すなわちは《全能》にも繋がるではないか！

——《始まりにして、終わり》、《全知にして、全能》。

アルIIイクシルの父ならば、《唯一の神に帰依するもの》であるラフマンならば、これを《神》とも呼ぶだろうか？

そう、幼かったあの頃、共に戯れに話し合っていた全知全能の神。その神の領域に鵬翦は既に手を伸ばしている。故に鵬翦は《漆黒の法衣》であり、また、《神に反逆する女》なのだ。

故に少女は畏怖を以って、呼ばれるのだ——《黒衣の魔女》と。

「よっ、アルIIイクシル」

と、呼びかけられ、アルIIイクシルは振り向いた。その先の顔を見て、気が重くなっていたアルIIイクシルも、思わず顔を綻ばせた。

そこには

——アルIIカマル

と、呼ばれる少年がいた。彼はアルIIイクシルの一つ年上であり、アルIIイクシルがウルルに登録されてから出来た——今、最も親しい友であった。

ムニール・アルIIカマル・イブンIIアジーズを眼にしたものは何よりもまず、その美貌に驚くだろう。実際、アルIIイクシルもその口だった。顔を知らなかった時、彼の《月》

という通称は《照らすもの》という名前と対を為すものだろうとアルIIイクシルは考えていた。しかし、彼を一目見た瞬間に、なるほど、《月》とはこの容貌に拠るものか、あるいは容貌と名前をかけたものだと考えを改めた。かつて、鵬翦に出会った時、アルII

イクシルはその容姿に驚いたものだが、彼を見る度にその経験が馬鹿馬鹿しくなる。彼と鵬翦を比べると、幼い日の己の視野の狭さを恥じずに入られない。彼はそれだけの美形だった。

さらに彼の本質はその容貌ではないことも、アルIIイクシルはすぐに思い知らされることになる。

彼は優れた知性と秀でた知識を備えていた。無論、これはウルルにいうだけで、証明されているようなものだが、それがウルルに『何とか引っかけかかっている』アルIIイクシルとは比べ物にならないことも十分証明されている。何しろ、この若さで《赤》候補である。無論、既に《黒》である鵬翦には到底及ばないが、今やあの異端の天才に拮抗でき

るのは、それこそ、あのミンガラマほどのものだ。比較することが間違っている。

容姿に優れ、実力もある。故に彼は実に女性にもてる。入学当初から、彼に恋慕する少女達は数知れない。いくら、親が金持ちとはいえ、いかんせん、容姿にも実力にも見るべきところはなく——なんとというか、こう、全体的にぱつとしない——まあ、要するにちつとも女性にもてないアルイクシルとは対極に位置する少年であった。

そんな訳でかつてのアルイクシルは率直な憧憬と一抹の羨望を抱きつつ、この美少年を遠くから覗いていたものであった。するとある日、何を思ったのか、彼は並み居る美少女達の群れをかき分けて、遠くから彼を覗いていた何の取り柄もない少年——アルイクシルに声をかけてきた。

その時、アルイクシルは何かの間違いではないかと疑った。しかし、彼は当然の如く真摯な態度と誠実な姿勢、巧みな話術と豊かな知識で、アルイクシルに話しかけてきた。驚いたアルイクシルも、とりあえずは彼を見習い、真摯な態度と誠実な姿勢で、多少おどおどしつつも、それに応えた。そして、二人は友人となった。

……後に語るには、その時、彼はアルイクシルと友になることを望んで、そうしたのだという。

確認しておくが、アルカマルは女性が、まして美少女が嫌いなわけではない。

彼には友人が多く、その中には勿論、女性や美少女も多い。ただ、彼は心根が優しく——多分、それが友人の多さに繋がっているのだろう——アルイクシルのように、ただ遠くから眺めているだけの者がいると、つい、声をかけてしまうのだった。彼は『要するに節介焼きなんだよなあ』と自嘲していたが、アルイクシルは勿論、そんな風に考えたことはない。人付き合いが不得手なアルイクシルにとって、正直、彼の存在はありがたいのだ。そもそも、アルイクシルは多くの者にとって、畢竟、イブンラフマインの息子——すなわち、帝国で大規模の豪商の息子であり、その癖、彼自身はぱつとしない人間であり、周囲にどう扱っていか困惑させる存在であった。実際、彼と出会うまでは人の輪に溶け込むのに苦労していたし、彼がいなければ、今でもそうであったに違いない。

無論、だからといって、彼個人との関係自体を決して軽いものと考えたこともない。皆に好かれるだけあって、共にいて楽しい。しかも、彼の方でもアルイクシルを気に入っているらしい。不思議がると、彼は『おいおい、俺は嫌いな奴と付き合うほど、酔狂じゃないぞ。お前にはな、独特の魅力があるんだよ。だから、別にお前を気に入っている奴は俺だけじゃいけないぜ。……あ、いっておくが、俺は異性愛者だからな。そのところを勘違いするなよ』と言ってくれた。

だから、アルイクシルも彼との付き合いを大切なものと捉えている。何より、彼には鵬クシヤと話す時の様な緊張感がなくていい。付き合っていて、疲れないのだ。彼の通り名クシヤの理由は本名でも容姿でもないと、アルイクシルは思う。その優しさ故だ。砂漠でギラギラした

太陽に苦しめられた者達が、夜中に穏やかな光を以って道を照らしてくれる《アル||カマル月||ムニール・アル||カマル》に皆が惹き付けられるかのように——人を引き付ける氣質を以って、《月の如く照らすもの》と呼ばれるのだ。

だが、そんな誇るべき友に対して、今日のアル||イクシルは軽い困惑と共に「……どうかしたの？」と尋ねた。

ミンガ||ラマの様な最高位探究士は、アル||イクシルたち最下位探究士とは生活空間の次元で隔絶されている。今回アル||イクシルがミンガ||ラマの個室に呼び出された事は例外中の例外である。では、何故、アル||カマルが、その個室から出てきたアル||イクシルと出くわせるのか？もしや、アル||カマルも誰かに呼び出されているのか？

そんなことを考えていると、アル||カマルはため息をついた。

「つれないよな。お前を待っていたに決まっているだろう」

「ああ、そうか……ごめん」

アル||イクシルは赤面した。どうも自分には他人へ無神経なところがある。これでは師匠のことをどうこう言えないではないか……。

「で、どうだった」

「んー」アル||イクシルは少しばかり過去を修飾した。「やはり、今の僕じゃあ、師匠を満足させられなかったよ」

「ま、そうだろうな。おちこぼれのお前じゃ、百年かかってあの次元には到達できんさ」

そう言っ、アル||カマルはけらけらと笑う。しかし、その笑いには悪意がない。鵬翦ならば、侮蔑と嘲罵を隠さずに見下しているだろう。だが、アル||カマルの笑いは軽口を叩きあえる友同士という前提の上でこそその笑いだ。そんな友にアル||イクシルも幾分、気が楽になった。あの時は必死に感情を押し殺していたが、ミンガ||ラマの所業にアル||イクシルは傷ついていたのだ。悔し涙を流さずにいれたのは僥倖といってもいい。

「それで、師匠を満足させられなかったお前の論文はどうなった？」

「どうなったって？」事実をそのまま伝えるわけにもいかず、アル||イクシルはどうとでも取れる返事をした。

「ほら、あるだろう。焚き木の火種にされるとか、羊の餌にされるとか」

「……何だよ、それ？」

「知らないのか、まあ、お前って男はいつもぼんやりしているからな」

「思索に耽っていると云ってくれ」

「だから、世間に疎くなるんだよ。有名だろう。ミンガ||ラマ相手につまらない論文を見せると、ろくに批評もされずに悲惨な末路を用意されるって話」

「ただの噂だろう、それは」

……とはいったものの、アルⅡイクシルはその噂が真実であると確信した。なるほど、あんな目に合わされるのは自分だけではないのか。そう思うとさらに気が楽になる。こんなことならば、もっと噂話にも耳を傾けるべきであった。

「いやいや、鵬雛子が生物兵器の人体実験をやるうとしているというのと、同じくらいの信憑性を持つ話だぜ」

……一瞬、アルⅡカマルが何を言い出したのか、理解できなかった。

鵬雛子というのは鵬翦の氏字であり、要するにアルⅡイクシルの幼馴染のことだ。その彼女が生物兵器の人体実験……？

「ちよつと、待ってよ。何だよ、それ」

「知らないのか」アルⅡカマルはきよとんした。「有名な話だぜ？」

「……それはつまり、彼女が医学分野に転向して、何か、まだ効果のよくわからない危険な薬の治験を行おうとしている……というか？」

最大限、好意的に解釈したアルⅡイクシルの言葉にアルⅡカマルは首を振った。

「少なくとも、ウルルの倫理委員会に話は通っていない。だから、治験というのはないな」

「倫理委員会に話を通っていないなら、人体実験なんて……」

「ウルルの外でなら、倫理委員会の承認は必要ないだろう。大体、鵬雛子はアルⅡカマル・アズワド《黒衣》だぜ。

俺達みたいな下っ端とは違う。ウルルから独立し、まったくの個人で、それだけのことをやる権限と資金を与えられている」

「……そんな……。いやしかし……それは障害罪に抵触しないのか？」

「さあな」

「さあな……って!？」

「おいおい、落ち着けて」

声を荒げるアルⅡイクシルをアルⅡカマルを押し留めた。

「最後の質問。鵬雛子が生物化学兵器の人体実験をやったとして、それが傷害罪に抵触するか否かという問題については、なんとも言えない。俺は法学には詳しくないし、鵬雛子がどんな論拠に基づいて、その実験を行うかがわからないしな」

そこで、アルⅡカマルは大きく息を吸い、今までとは違う真剣みを見せた。

「だが、友人として、お前に忠告したい。これ以上、鵬雛子には関わらない方がいい。お前がこの話を知らなかったのなら、特にな」

「どういう意味だよ？」

「第一にお前にできることは何もない」

その一言に、アルⅡイクシルの勢いは一気に萎えた。たしかに、その通りだ。アルⅡイクシルには何もできない。いかにウルルの探士といえども、所詮は一介の学生だ。それも、飛び切り若くて、ずば抜けておちこぼれた。どんなに粋がっても、できる事など皆無である。

相手が世界最高峰の探究士《黒衣アルシヤタイナァ・カバ！アズワドの魔女アルカバ！アズワド》ならば、尚の事。《黒衣》は単なる飾りではない。先に述べられた通り、《黒衣》であるだけで、帝国から、莫大な資金と権限が与えられる。その気になれば、その資金で殖財に励むことも、その権限で企業と結合することも自在なのだ。

「第二にお前以外にも人はいる」

その一言に、アルⅡイクシルは少しばかり冷静さを取り戻した。その通りだ。もはや、この帝国は安定期に入っている。少なくとも、この帝都周辺ではかつての無法地帯の面影は既がない。社会の健全さを維持するための諸機能は十分に有効性を発揮している。鵬翦がそのような行いに走れば、必ずや抑止力が働くだろう。前述の倫理委員会とて、現状で鵬翦の行いを止める権限がないのならば、その現状を変えようと動き出すはずだ。

「第三に……よく考える、これはただの噂だぞ」

その一言に、アルⅡイクシルは汗顔に至った。そうだった。アルⅡイクシルと違い、アルⅡカマルは人並みに世間話に通じている。だから、風聞の類を語ることも多い。そして、それを承知の上で、アルⅡイクシルも話しているはずだったのに……。まったく自分は何を焦っていたのだろう。

「……とまあ、こんな理由で、お前は彼女との付き合いを止めた方がいい」

「は……？」この一言にアルⅡイクシルは肩透かしを食らった。「ごめん。ちよっと今のはついていけなかった。それに僕と彼女の付き合いなんて、今じゃあ、もうほとんどないよ。何せ、ただの幼馴染なんだからさ」

「お前な、もし『ムニール・アルⅡカマル・イブンⅡアジーズが生物兵器の人体実験をしようとしている』という噂を耳にしたら、どうする？」

「勿論、一笑に付すさ」

「……で、鵬雛子の場合は何故一笑に付せなかった？」

「……」

アルⅡイクシルは言い返せなかった。そう、幼馴染のアルⅡイクシルですら——いや幼馴染のアルⅡイクシルだからこそ——あの鵬翦なら、やりかねないと考えたのだ。これがアルⅡカマルなら、誰も信じない。

「この差異は資金や権限、あるいは能力ではない。……もつと別のものに由来している」

「……言動……それを生み出す人格か？」

齢十五で頂点に上り詰めた鵬翦であったが、その人格に対する評判は芳しいものではない。彼女は露骨に人を見下す。無能、凡愚などという言葉を人前で多用する。嘲り、蔑み、罵倒する。

人によっては『鵬雛子は若くして、過分な名声を得たゆえに驕慢になったのだ』などと指摘するものもいた。

勿論、古い付き合いであるアルⅡイクシルにしてみれば、それは違うと思う。

少なくとも、彼女は名声を得る前、戸籍年齢七歳ごろから、驕慢であった気がする。

——あるいは驕慢であったがゆえにこそ……。

しかし、鵬翦の人格が褒められたものでないという点には賛同している。アルⅡイクシルの見るところ、彼女には他者に序列を付けて接するところがある。この性質は必ずしも欠点とはいえないし、また万人の中に潜んでいるものでもあるだろう。だが、彼女はその性質が極めて先鋭化しているのだ。自分よりも劣る者たちを——例えば同じ《黒衣》アルⅡカパー・アズワド級の探究士などを除いた残りの全人類の大多数を——対等な人間とは見ていない。よって、彼らの自尊心を露ほども汲み取らない言動をとる。勿論、アルⅡイクシルに対しても、だ。畢竟、鵬翦にとつての他者とは、ごく少数の例外を除いて、自分の生活や研究を支えるためだけに、死ぬまで動き続ける歯車の一つ——間接的な奴隷にしか過ぎないのだろう。だから、彼らへの配慮などはそもそも念頭になく、せいぜい『ちよつと特殊な霊長類』として、関心を抱く程度だ。

それが彼女の文字通りの傍若無人さに繋がり、『ちよつと特殊な霊長類』をきたまま解剖し、虐殺しかねない印象を育んでいる。おそらく《黒衣アルⅡシヤイターナァ・カパー・アズワドの魔女》の称にはそういった含意もあつたに違いない。

「そうだ。それがあつたからこそ、お前は鵬雛子に限って、黒い噂を信じた」

「……………」

「そういう人間と付き合い合っていることが、お前にとつて、ためになるとは思えん。実際のあの魔女と付き合いがあるというだけで、お前のことを色眼鏡で見る奴もいるんだぜ」

「えっ」

「……鈍いお前のことだから、気にしていなかったと思つたよ」

「そんなに僕は鈍いかな……」

「鈍い……というか、他人に興味がなさ過ぎる。このままじゃあ、ミンガⅡラマ師匠や鵬雛子のような人間になるぜ」

「まさか」と、アルⅡイクシルは否定した。たしかにミンガⅡラマの無神経さにも、鵬翦の他者への嘲笑にも、その根底には共通して他人への興味のなさがあるのかもしれない。加えて、アルⅡイクシルにもちよつとばかり、人に無関心なところがある。しかし……。

「あの二人の傲慢さはその実力によって、支えられているものだ。僕にはあの二人のように拠つて立つものがまだない。あんな風になれるわけがないよ」

アルⅡイクシルはそう言つて、アルⅡカマルが軽口を返してくれるのを待った。しかし、何故か、彼は硬い表情と静かな沈黙を続けた。そして……。

「ほう『まだ』ね。……それを手に入れるつもりなのか？」

「それは……」

アルⅡカマルの一言にアルⅡイクシルは口ごもった。『手に入れられるつもりなのか?』と問わなかったのは彼の優しさなのだ。この優しさには応えなければいけない。アルⅡイクシルは自らに言い聞かせた。

「ま、幼馴染とはいっても、今じゃ、向こうは雲上人——どうせ、彼女とは疎遠になっっているんだろう。この際、縁を切っておけ」

沈んだ空気を吹き飛ばすように、アルⅡカマルは再び人に好かれる笑みを見せた。

「俺たちからすれば、所詮、別の世界の話さ」